



▶久保田 彩乃 特任助教

被災者の声をアーカイブ化 地域実践特修プログラム むらの大学

福島大学の地域実践特修プログラムの一環で、全学類の1年生を対象に原発事故に伴う避難を経験した市町村でフィールドワークやアーカイブ活動を行う授業「むらの大学I・II」。今年度は従来の川内村と南相馬市小高区、大熊町に加え、昨年に帰還困難区域の一部で避難指示が解除された飯館村でも実施します。受講生はこれら4地域で復興を目指してたくましく生きる住民らにインタビューし、その成果を冊子やウェブで公開するアーカイブ活動に取り組みます。

5月18、19両日には初回のフィールドワークが行われ、約200人の学生が参加しました。飯館村ではホームセンターの空き店舗を改装した交流拠点「図函倉庫(ズットソーコ)」と情報通信技術を活用したスマート農業を実践する菅野宗夫さんの自宅を訪問。地域再生に懸ける新旧住民の思いに耳を傾けました。

担当教員の一人、久保田彩乃・教育推進機構特任助教は「学生には、体験やスタンスが一人一人違う被災者の話を聞いて、よりよい未来をつくっていくための糧にしてほしい」と話しています。



▶図函倉庫を立ち上げた矢野淳さん(右端)の話を聞く受講生ら

相双地域支援サテライトの活動

地域復興支援



▶3月、岩手県大槌町で開かれたパネル展

教育環境整備



▶段ボールベッド作りに挑戦

福島の被災地12人の歩み 東京や東北でパネル展

福島第一原発事故で避難指示が出されるなどした福島県の12市町村に暮らす帰還住民や移住者の生きざまを紹介するパネル展「『被災地』福島 十二人の12年」を2~6月、東京と福島、岩手などで開催しました。

原発事故関連の話題や報道が先行する中、被災地域に住む市井の人々の歩みや何気ない日常、思いを知ってもらおうと企画。東京都台東区や目黒区、福島大附属図書館、津波被災地の岩手県大槌町、前橋市の各会場で12人の写真と記事のパネルを展示しました。東京と大槌町では展示に登場する住民を招いたトークショーも開き、被災地の現状を伝えてもらいました。

会期中は首都圏や福島、岩手両県などから多くの来場があり、「12人それぞれのエピソードが興味深かった」「人を通して被災地の今を伝えるという点がよかった」などの感想が寄せられました。

全パネルのPDFファイルは本サテライトのホームページ(最下段QRコード)から見ることができます。



▶トークショーでは移住者らが登壇(東京・目黒で)

段ボールベッド作りなど体験 福大で被災地の中学生ら

3月30日、「福島大学に行こう! 大学生生活ちょっと体験」と銘打ち、被災12市町村の中学生を対象とした交流事業を福島大で開催しました。

葛尾村と大熊町、富岡町の中学生たちが、福島大災害ボランティアセンターの学生と共に、プログラミング教室や大学構内ウォークラリー、防災に関するワークショップに参加。

大学生のサポートを得ながらロボットを操作するプログラムを組んだり、福島大に関する少しマニアックなクイズに挑戦したりしたほか、昨今の避難所で目にする段ボールベッドを作る体験もしました。人が乗ってもつぶれないように試行錯誤しながら、限られた材料と時間で寝台を組み上げ、床に敷いただけの段ボールとの寝心地の違いも確かめました。中学生からは「避難所生活って大変そう。家でも段ボールベッドを作ってみよう」との声が上がっていました。



▶ロボット操作のプログラムを学ぶ

「相双の風」は、被災地域の今と、福島大学地域未来デザインセンター相双地域支援サテライトの取り組みを紹介するニュースレターです。相双地域支援サテライトは被災地と福島大学をつなぐ現地拠点として、被災地域復興に向けた支援活動を行っています。



TOPICS | トピックス

人馬一体で子ら「代かき」 新緑と青空の浪江町で

泥だらけになりながら代かきをする馬と子どもたち

浪江町酒田地区で4月28日、馬を使って田植え前の水田を耕す昔ながらの代かきが行われました。新緑と青空がまぶしい広さ50アールの田んぼで、小学生の親子ら40人が4頭の馬やポニーと共に泥だらけになりながら歓声を上げました。

農業の機械化が進む前は当たり前だった馬の力を借りる「馬耕」の文化を子どもたちに体験してもらおうと、NPO法人「相馬救援隊」(南相馬市原町区)が主催しました。同法人は2011年に被災地支援を目的に設立され、同法人は2011年に被災地支援を目的に設立され、現在は乗馬体験会や馬と一緒に運動会など馬に親しんでもらうイベントのほか、ホースセラピーで教育福祉に馬を活用するなど、相双地域に根付く馬文化の継承や郷土愛を育む活動をしています。

事務局の中澤葉子さん(41)は「震災と原発事故を経験しエネルギーに関心の高いこの地域で、燃料も要らず排気ガスも出ない馬耕や、馬に木材を運ばせる『馬搬』を行うのは大きな意味がある」と話します。



▶「馬と共生する文化が根付くこの地域をさらに豊かにしていきたい」と話す中澤さん



一人一人に寄り添い、支え合う 高齢化率県内一・飯舘村の取り組み

飯舘村では2017年3月、一部地域を除き避難指示が解除されましたが、帰還した住民のほとんどは高齢者です。村の高齢化率は68.6% (22年福島県発表)と、県内で最も高くなっています。以前はできていた車の運転や、習慣としていた運動などができなくなったという住民も増えています。高齢化に対応する、村の取り組みを紹介します。



村内外で「つながる」サロン 飯舘村社協 お茶会やゲーム、園芸も



▶「福祉の村づくり」を目指す飯舘村社協の皆さん

飯舘村社会福祉協議会では次の10年に向かって活動目標「互いに支え合い、安心して暮らせる福祉の村づくり(地域共生社会)」を掲げ、「一人一人に寄り添い・我が事として」をモットーに、高齢化の進む村民のコミュニティづくりや健康づくりに取り組んでいます。

その一つに住民が集うサロンの運営があります。帰村直後の2017(平成29)年5月から8月にかけて「お帰りなさいお茶会」を開催、9月には帰還した住民同士のつながりづくりのため、飯舘村サポートセンター「つながっぺ」でのサロンを開始しました。平日は毎日開催し、登録者約100人が居住地区ごとに日替わりで参加、「週に1回みんなで集まることができ、すごく楽しい」という声も聞かれます。今年度は参加者による園芸部「つながっぺ菜園」もスタートしました。

また、村内外でのサロンもサポートしています。村内サロンは19(令和元)年度から始まり、各行政区が主体となって運営、現在8行政区で月1回ずつ行っています。村外サロンは3団体が21(令和3)年度から避難先で団体を立ち上げ、自主的に活動しています。内容は介護予防体操や出前講座、食事会、グラウンドゴルフなど様々です。

さらには、避難先での村民同士の交流の場として「お茶のみ会」を12(平成24)年度から継続し、南相馬市、川俣町、福島市で年に2回開催しています。

「声なき声」把握を

村社協の菅野純子事務局長は「今はこれまでの活動を継続しつつも、現状に合うように切り替えていく時期に差しかかっています。サロンもただ集まるだけではなく、運動の機会を増やすなど、今後ますます進む地域の高齢化に対して必要なプログラムを考えることが重要です」と課題を話します。

佐藤照子主任も「村民は安心を求めて帰ってきましたが、現実には厳しい。移動販売やクリニックなどの生活インフラは徐々に整備されていますが、自分で運転ができない方や、家族や隣近所が帰村しておらず、寂しい思いをしている方々も多くいます」。

また、「自分の意思で帰ってきたのだから、周りに迷惑はかけられない」という意識が強い村民も多く、戸別訪問を実施するだけでは気づくことのできない課題も数多くあるといいます。「声なき声」を捉えるためにも、村社協では今後も傾聴活動を大切にしていこうと決めています。

現在、サロン未開催の地区からも実施を望む声が上がりに始めていて、村社協として住民主体のサロンを徐々に増やしていくことにしています。今後はボランティア組織の立ち上げなどを通じ、村民同士が支え合い、つながり合いながらサロンを運営できる仕組みを構築する計画です。



▶「つながっぺ」サロンで輪投げを楽しむ参加者



▶佐須地区サロンではスカットボールが大人気

移動販売車で地域見守り セブンイレブンと協定

飯舘村は2023年8月に株式会社セブン-イレブン・ジャパンと「地域見守りの取組みに関する協定」を結び、両者が連携して高齢者らの見守り活動を行っています。

現在は「いいたて村の道の駅までい館」併設店舗の移動販売車が週3回、村内の個人宅や事業所を回り、買い物支援のほか、利用者とのコミュニケーションを図り、心のケアの役割も果たしています。

利用者の90代女性は「定期的に総菜や弁当、野菜を買うことができとても助かっている」と喜びます。この女性の娘も「移動手段がなく、自分で買い物ができない高齢者も多い。母は買い物の機会があること自体をととても楽しんでるようです」と歓迎しています。

移動販売担当で村在住の山内麻由子さんは「開始当初は、必要な時だけ回ってもらえればいいと遠慮がちだった利用者も、今は楽しみに待っている。予想以上に好評です」と手応えを話します。山内さんはその日の訪問先や天候に合わせて商品の数や種類を変えたり、リクエストのある商品や人気の商品を積極的に取り入れたりして品ぞろえを工夫。会計前には「今日はこれ買わなくていいの?」と尋ねるなど、利用者寄り添った販売を心掛けています。

「買い物の機会を提供するのはもちろんだが、何より地域の見守りのために移動販売車は必ず走らせねば」と山内さん。今後、増加が予想される高齢で運転できない人々への支援の必要性をひしひしと感じているそうです。「利用者の要望に可能な限り応えながら、私たち村民の声を届ける役割も果たしていきたい」と語ってくれました。



▶移動販売車で買い物を楽しむ村民

福大生もサロン支援 ボラセンや学修で



福島大学公式
マスコットキャラクター
めばえちゃん



▶6月14日、佐須地区サロンを訪ね住民と健康体操に励む福島大生ら

飯舘村では、高齢化や震災による世帯分離、新型コロナの影響で、村民が若い人と触れ合う機会が少なくなっています。

そこで福島大災害ボランティアセンターの学生は2023年9月から、各地区のサロン活動に数度にわたって参加。また24年度は、福島大学復興知事業「ふくしま未来学」の協働プロジェクト学修として、福島大生が「つながっぺ」や各地区のサロンを訪れます。

本学は今後も住民の方々々と交流しながら、地域の課題や要望を把握し、自分たちにできる支援について考え、実行していきます。